
ポケモンDP・未来への維新

羽鳥 雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンDP・未来への維新

【Nコード】

N5899H

【作者名】

羽鳥 雷

【あらすじ】

多数のアニメキャラが登場、ポケモンワールドで大活躍するパラレル小説。あのキャラとこのキャラの夢の共演も…？

はじめに（「愛読上のご注意」）

はじめに（「愛読上のご注意」）

この小説は、かの大ヒット中のニンテンドーDS専用ソフト「ポケットモンスターダイヤモンド・パール・プラチナ」（管理人はダイヤモンドをプレイ中、ちなみに弟はパール。プラチナは両名とも所持）のストーリーと、実際にプレイした上での体験を元にした管理人オリジナルの二次創作（＋クロスオーバー）小説です。

一部ゲーム本来のストーリーとは関係ないイベントやキャラが登場する事がありますが、管理人の「妄想」と「趣味」というスパイスを加えてこのような結果になったのでご了承の上お読み下さい。

尚、当小説の登場キャラや内容は、ゲーム発売元である任天堂株式会社、株式会社ポケモン、及びキャラのモデルになったキャラが登場するアニメ・アニメ映画作品とは一切関係ありません。

以上の事を踏まえた上でお楽しみ下さい。

Vol.1「会長令嬢、旅立つ！」(1)

―豊かな自然が、人間達やポケモン達を優しく育む美しい土地。こ
こは、豊かな緑と清らかな水が大地を浄化するシンオウ地方。

今日もいつもと変わらぬ朝を迎え、鮮やかな朝日が地を紅に染めて
いく。

そゆ事でこちらは、シンオウ地方で一番小さい町だがその敷地の3
0%を占めるであろう馬鹿でかい豪邸が一番に目に留まる…フタバ
タウン。このお屋敷で、一人の少女が二人のメイドによって起こさ
れようとしているようですが…。

イズミ「お嬢様！お嬢様！！起きて下さい！もう10時過ぎてます
よー！」

ガンガンガン…（フライパンの裏をおたまで叩く音）

ミツキ「さすがお姉ちゃん！その調子でお嬢様の目をパツチリ覚ま
させて下さい！」

…このイズミとミツキとかいうメイドさん、姉妹のようすな。

もぞつ、もぞ…

ベッドの中でまだ夢の中の少女。この少女こそ…、イズミとミツキ
が「お嬢様」としたい、この家の主人の娘で、しかもこの物語の主
人公であるサクラ！！ご本人様であります！！！！

サクラ「…ZZZ（まだ熟睡中）」

イズミ「もう！！フライパンの裏をおたまで叩いても効果がないな

んて…。呆れたもんよねっ」
ミツキ「仕方ないですね～。こうなったら最終手段に着手しましょ
う！ご主人様～！！」

ミツキのヘルプに応えた誰かが…ボタンツと扉を開けて、サクラの
部屋に入ってきたではないですか！！その誰かとは…。

それは、サクラの母親でこのお屋敷の主人でシンオウ地方のハンバ
ーガーショップチエーンの子エア90%を占める「マグネトロンハ
ンバーガー」代表取締役会長のユウコだった。

イズミ「ご主人様、今朝も私だけの力で起こす事が出来なくて申し
訳ありません」

ユウコ「いいのよ。私じゃないと簡単には起きてくれないのよ、
普通」

するとユウコはフライパンを使わずその麗しい口だけで…。

ユウコ「起きききななささいつ！！！！」

まるでフタバタウン全体を震わすような馬鹿でかい声が響いた。
…次の瞬間の事である。

サクラ「う、うん…おはよう、ママ…」

ユウコ「おはよう。今日もいい天気ね」

ミツキ「…ね、やっぱりご主人様はすごいですよ（汗）」

イズミ「確かに…。あんなに熟睡してたお嬢様を一発で…」

午前11時。ユウコは遠く離れたコトブキシティにあるマグネトロ
ンハンバーガー本社に出勤。

ユウコ「じゃあね、サクラ。行って来るわね」
サクラ「ママ、今日もお仕事頑張ってね」

お屋敷の玄関では総勢50名のメイドがお見送り。

イズミ&ミツキ「行ってらっしゃいませ、ご主人様」
メイド達「行ってらっしゃいませ、ご主人様」

メイド達が一斉に頭を下げる中、ユウコは漆黒のリムジンに乗って出勤して行った。

Vol.1「会長令嬢、旅立つ！」(2)

サクラも去って行く母親が乗ったリムジンに向かって手を振っていたら、ある伝言が伝えられた。

イズミ「サクラお嬢様、お隣りのマンションにお住まいのお友達のシャオラン様から伝言をお預かりしております」
サクラ「えっ！？シャオラン君から？」

解説すると、シャオランはサクラの幼馴染みで歳も同じく、幼い頃は毎日仲良く遊んでいたそう。今でも、時々食事に行ったりはするらしい。

イズミ「えっと、『ちよつと人前では言えない事があるから町の外れのシンジ湖に一緒に来てくれないか？』との事です」

サクラ「シャオラン君が人前では言えない事って…？」

ミツキ「とにかく、お隣りのマンションに行ってみて下さい！」

サクラ「わ…わかった」

ミツキ「でも注意して下さい。草むらには野生のポケモンがいますから、絶対に草むらに入らないようにして下さいね」

サクラ「うん。わかってるよ。いつもママに言われているから」

イズミ「では…。行つてらっしゃいませ、お嬢様」

メイド達「行つてらっしゃいませ、お嬢様」

サクラ「行って来ます」

サクラはメイド達にお見送りされる中、幼馴染みのシャオランが住むマンションに向かった。

サクラ「シャオラン君！来たよ」

マンションの玄関で待っていると…。

シャオラン「サクラ！おはよう！！来てくれたんだ…」

サクラ「シャオラン君、人前では言えない事って何…？」

シャオラン「とにかく、一緒に来てくれないか？」

サクラ「う、うん…」

サクラがそう答えると同時に、シャオランはサクラの腕を引いて町の外へダッシュして行った。

二人は町の外れにある美しい湖・シンジ湖にやって来た。この湖はいつも宝石のように美しく輝いていて、近所のカップル達にとっては最高のプロポーズスポットとも言われている。

サクラ「いつ来てもこの湖は綺麗だね…」

シャオラン「うん…。あのさ、サクラ…。君にどうしても伝えたい事が…、あつてさ…」

サクラ「何？シャオラン君」

シャオラン「お…、俺は…。君の事が…」

シャオランがそこまで言ったその時だった！！

キヤー！！！！

どこからか、幼い女の子の悲痛な叫びが聞こえてきたのは。

サクラ「誰かが酷い目にあっている！」

シャオラン「草むらからだ！」

サクラとシャオランが声のする方へ駆け付けたところには、草むらの中で野生のポケモンに襲われて泣いている幼い女の子がいた。

女の子「ポケモンを見に来たら突然ムツクルが襲って来ちゃって…。そこのお兄ちゃんとお姉ちゃん！助けて下さい！！（泣）」

サクラ「どうすればいいの…？」

シャオラン「あれっ？あそこに鞆が置いてあるぞ！誰かが忘れて行ったのかな？…開けてみよう」

シャオランが忘れ物らしき鞆の蓋を開けると…。中にはポケモンが入るカプセル式の入れ物・モンスターボールが3つ収められていた。

シャオラン「これは…。間違いない！正真正銘、本物のモンスターボールだ！！」

サクラ「モンスターボール…？」

シャオラン「ああ。母さんから教わったんだけど、この中にはポケモンという生き物が入っていて、そのポケモンを出して闘わせる人の事をポケモントレーナーというそうだ。俺達もう10歳過ぎてるから、ポケモンと一緒に旅に出る資格があるんだけど…」

サクラ「メイドのミツキさんが言ってた…。『草むらには野生のポケモンがいるから入っちゃいけない』って…。それって、自分のポケモンを持っていないからダメって事じゃないかな？」

女の子「そんな所で井戸端会議してないで早く助けて下さい！！」
シャオラン「すっかり忘れてたよ！今助けるからね！」

サクラとシャオランは鞆の中から適当に一個ずつモンスターボールを取り出し、地面に向かって投げ付けた。

Vol.1「会長令嬢、旅立つ！」(3)

二人が投げたモンスターボールからポケモンが登場！

サクラのモンスターボールからは猿に似たポケモン・ヒコザル、シヤオランのモンスターボールからはペンギンに似たポケモン・ポツチャマが現れた。

女の子「あれは…。シンオウ地方初心者用ポケモンのうちの二匹…。ヒコザルとポツチャマじゃないですか!？」

サクラ「えっと…どうすればいいんだっけ…?」

シヤオラン「技を指示すればいいんだよ!…そうだな。多分このポケモンが使えるそうなのは…『はたく』か?」

サクラ「私は…爪で引っ搔きそうだから『ひつかく』?」

そこで二人は適当に技の名前を言ってみる事にした。

サクラ「ヒコザル、『ひつかく』!」

シヤオラン「ポツチャマ、『はたく』!」

二人の指示が当たっていたのか、二匹は見事な引っ搔きっぷりとはたきっぷりで野生のムツクルを追い払う事に成功した。

シヤオラン「大丈夫かい?怪我はない?」

女の子「はい!大丈夫です…あっ!」

そこへ割って入って来たのは、一人の若い女性。

女性「チヨ!あなたまた勝手に町の外に出て!!!心配したのよ!」

女の子「ごめんなさい…」

サクラ「この子の…お母さんですか？」

女性「すみません。うちの子が迷惑をかけたみたいで…」

シャオラン「いえ、俺達は別に…」

女性「チヨ、このお兄ちゃんとお姉ちゃんがいなかったらあなたも
つと大変な目に合っていたわよ！ちゃんとお礼を言いなさい！！」

女の子「あ…。ありがとうございました…」

女性「さあチヨ、行きましょう」

女の子は母親に手を引かれて、湖を後にした。

その女の子と母親と入れ替わるように湖にやって来たのは、ポケモン
ントレーナーらしきかつこいいイケメンの若者だった。

若者「ああ、良かった。やつぱりここにあったんだ…」

シャオラン「あの…、この鞆とポケモンはあなたの物ですか？」

若者「僕の…伯父さんのだけと何か？」

サクラ「あの…。ごめんなさい！いきなり野生のポケモンが襲って
来たから鞆の中のポケモン、勝手にバトルさせてしまったんです…」
シャオラン「すみませんでした」

若者「うん…。後でマサゴタウンにあるポケモン研究所に来た方が
いいよ。もやもやしてても仕方ないし」

サクラ&シャオラン「は、はい…」

若者はそう言い残して、最後の1つのモンスターボールが入ったま
まの鞆を持って去って行った。

サクラ「どうする？シャオラン君…」

シャオラン「うん…。まずは一旦家に帰って休もう。それから研究
所に行こう。研究所があるマサゴタウンはフタバの隣り町だもんな」

サクラ「わかった」

1時間後、サクラとシャオランは研究所があるマサゴタウンにやって来ていた。

若者「おつ、やあ！さっきの二人じゃないか？」

サクラ「はい…。ポケモンを返しに来たんです」

シャオラン「先程は本当に申し訳ありませんでした」

二人は深々と頭を下げた。

若者「僕に頭を下げられたって…（笑）。伯父さんが許してくれるかはまだわからないしね。そうだ！自己紹介するの忘れてたよ。僕の名前はシン。シンオウ地方のポケモン研究の権威・ナナカマド博士の甥っ子さ！」

サクラ「私はサクラ。マグネトロンハンバーガー会長の娘です」

シャオラン「俺はシャオランです」

シン「よろしく。じゃあ早速入ろうか。中で伯父さん達が待ってるから」

サクラ&シャオラン「はい！」

シンの案内で研究所に通されたサクラとシャオラン。そこで待っていたのは、シンの伯父でシンオウ地方のポケモン研究の権威・ナナカマド博士と先程二人が助けた女の子とその母親だった。

シン「伯父さん、例の二人を連れて来たよ」

ナナカマド博士「うむ…。ご苦労だったな」

女の子「あ、さっきのお兄ちゃんとお姉ちゃんだ！さっきはありがとうございましたー！」

サクラ「あの…。さっきは勝手にポケモン使ってしまったて、本当に

「ごめんなさい！」

シャオラン「すみませんでした」

ナナカマド博士は神妙な面持ちで二人の訴えを聞き入れる。

ナナカマド博士「うむ。わしは怒つとらんぞ。むしろ感謝しておる」
シャオラン「なんですか？」

ナナカマド博士「あの時鞆を忘れていなかったら、君達のような前途有望なトレーナーの卵に出会えていなかったかもしれないから…」
サクラ「前途有望…」

Vol.1「会長令嬢、旅立つ！」(4)

ナナカマド博士「シンから聞いたのだが…、君達のポケモンの扱い方は一際輝いているように見える。そこでだ、君達の実力を見込んである重大なミSSIONをお願いしたい」

サクラ「ミSSIONって、何ですか？」

ナナカマド博士「この広いシンオウ地方に分布する150種類のポケモンを…。このシンオウ地方版ポケモン図鑑に記録していつて欲しいのだ」

シャオラン「大変そうだけど…、何だか面白そうだな！」

ナナカマド博士「サクラ、シャオラン。引き受けてくれるか？シンにも同じミSSIONを頼んだのだが…、一人では大変になるからな」

サクラ&シャオラン「もちろん喜んで引き受けさせて頂きます！」

ナナカマド博士「うむ！せん別としてさっき君達が使ったポケモンはプレゼントしよう！！確かサクラはヒコザル、シャオランはポツチャマだったな。折角だから、名前をつけてみてはいいかがかね？」

サクラ「ありがとうございます！よろしくね、ヒコザル。今からあなたの名前は、『フレア』よ」

シャオラン「博士、ありがとうございます。大切に育てます！ポツチャマ、今から君の名前は『バブルス』だ」

シン「良かったな。二人はこれからは立派なポケモントレーナーだな」

サクラ「はい！」

シャオラン「サクラ、今から俺と君はライバル同士だ！…負けないからな」

サクラ「私も負けないわ」

自分のポケモンをもらって大喜びのサクラとシャオランを尻目に、膨れている少女がいた。先程二人に助け出された、チヨという少女

だ。

チヨ「いいなあ……。私も、自分のポケモンと一緒に旅をしたいのに……」

今にも泣きそうなチヨを見て、ナナカマド博士はある提案をした。

ナナカマド博士「うむ……。要するにユカリさん、一人では行かせられないって事は、二人なら大丈夫って事ですか？」

ナナカマド博士はチヨの母親・ユカリに質問する。

ユカリ「え、えつと……。はい、一人ではダメなんですよ。年上の人が付いてくれたらありがたいのですが……」

それを聞いて、ナナカマド博士は少しニヤリとした。

ナナカマド博士「チヨ、話があるのだが」

チヨ「何ですか、博士？」

ナナカマド博士「君には確か……。お兄さんがいたと聞いたのだが」

チヨ「はい！カムイお兄ちゃんとはポケモンと一緒に、オーキド博士がいらっしゃるカントー地方を旅しているんです！」

チヨは明朗な声で質問に答える。

ナナカマド博士「じゃあチヨ、そこのお姉さん……サクラと旅をしてはいかがかね？」

サクラ「えっ！？私、この子と一緒に旅するんですか？」

ナナカマド博士「うむ。チヨは10歳の誕生日以来、ずっとポケモンと旅をしたくてたまらなかったそうだ。しかし、お母さんのユカ

リさんが一人では行かせられないって言うからな。せめて年上の同行者がいればいいのだが…。チヨと同じ女の子のお前なら、きつと上手くやっていけると思うのだが、どうかね？チヨの面倒を見てくれないか？」

ユカリ「私からも、お願いします。チヨの望みを叶えない訳にはいかないんです」

ユカリは深々と頭を下げ、サクラに悲願する。

サクラ「わかりました。確かに、旅は人数が多い方が楽しいですし…」

ユカリ「ありがとうございます！良かったねチヨ。あなた、ポケモンと一緒に旅ができるのよ」

チヨ「うん！お姉ちゃんありがとう！…あ、これからは毎日一緒にだから、親近感を持って『サクラちゃん』と呼んでいいですか？」

サクラ「いいよ。私もあなたの事を『チヨちゃん』と呼ぶね」

チヨ「はい！じゃあサクラちゃん…。よろしくお願いします！」

サクラ「よろしくね、チヨちゃん」

チヨ「ところで博士、私のポケモンは…？」

ナナカマド博士「ちゃんと用意しておる！君には、このポケモンをやるっ」

ナナカマド博士は、チヨに一つのモンスターボールを手渡した。

Vol.1「会長令嬢、旅立つ！」(5)

チヨ「この中にポケモンが…。えいつ!!」

チヨは地面に向かってボールを勢いよく投げ付けた。ボールの中からは狸に似たポケモン・ビツパが現れた。

チヨ「わあ…。可愛い！名前つけてもいいですか!？」

ナナカマド博士「もちろんだとも。君のパートナーになるポケモンだからな」

チヨ「じゃあ…。タムタム！この子の名前は、タムタムです!!」

ユカリ「良かったねチヨ…。これからどこに行く気かしら？」

シン「まずはマサゴの隣り町のコトブキシティに行くといいよ。あそこには町中の初心者トレーナーが集まる『トレーナースクール』という塾があるからね。きつと勉強になると思うよ」

チヨ「トレーナースクール、一度行ってみたかったんです!そうと決まったらサクラちゃん、早速出発しましょう!!」

サクラ「ええ!!コトブキシティには私のママが働いている会社の本社があるから…」

ユカリ「ああ、確かあそこは…。ユウコさんって方が会長をしておられるハンバーガーショップチェーンの本社よね。サクラちゃん、あの会長の娘さんなの？」

サクラ「ええ、一応…」

シン「僕が途中まで送って行くよ。…あれっ?シャオラン君は？」

ユカリ「ああ、シャオラン君なら、もうコトブキに向かったわよ。よっぽどサクラちゃんに負けたくないみたいね」

サクラ「シャオラン君…。私も、シャオラン君には負けたくない。行きましょう!すぐ追いついてみせるから!!」

サクラは勢いよく研究所を飛び出して町の外へ駆けて行った。

チヨ「サクラちゃん！待ってよ」（汗）」

シン「もう、サクラちゃんもチヨちゃんもお転婆娘だなあ（笑）」

ナナカマド博士「うむ！お転婆なのは元気な証拠だ！！ハハハ…」

ユカリ「博士…。またお菓子ばかり食べてたら虫歯になりますよ」（笑）」

一歩先に行く、親友でありライバルのシャオランを追いかけてサクラは走る。

サクラ「待ってなんかられない。大きな目標があるから！！」

こうして、一人の少女の物語が始まったのである。

Vol.1（終）

Vol.1「会長令嬢、旅立つ！」(5)(後書き)

次回予告

サクラ「サクラです。親友でありライバルのシャオラン君を追いかける形で、私とチヨちゃんはコトブキシティにやって来たの。そこで、チヨちゃんが悪者に連れ去られたんだけど、ケーシイというポケモンの使い手のリュウタさんに助けてもらったの。リュウタさんはこの町のトレーナーズスクールの塾長さんの息子でお手伝いをしているのよ。リュウタさんの案内で、私達はコトブキシティ市内でたくさん腕試しをする事になるんだけど…。

次回・『ポケモンDP・未来への維新』Vol.2『百聞は一見に如かず!』

サクラ、ハイパーミラクルパワーで頑張ります!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5899h/>

ポケモンDP・未来への維新

2010年10月12日02時21分発行